

国立国語研究所学術情報リポジトリ

明治初期東京語の否定表現体系： 『安愚樂鍋』における「ない」「ねえ」「ぬ」「ん」の用法

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飛田, 良文, HIDA, Yoshifumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001775

明治初期東京語の否定表現体系

——『安愚樂鍋』における 「ない」「ねえ」「ぬ」「ん」の用法——

飛 田 良 文

- 1 はじめに
- 2 存在・指定・状態の否定表現体系（形容詞の場合）
 - 2-1 形容詞「ない」「ねえ」の実態
 - 2-2 形容詞「ない」「ねえ」の否定表現体系
- 3 動作の否定表現体系（助動詞の場合）
 - 3-1 助動詞「ない」「ねえ」の実態
 - 3-2 助動詞「ない」「ねえ」の否定表現体系
 - 3-3 助動詞「ぬ」「ん」の実態
 - 3-4 助動詞「ぬ」「ん」の否定表現体系
 - 3-5 助動詞「ない」「ねえ」と「ぬ」「ん」との関係
- 4 まとめ

1. はじめに

明治初期東京語の否定表現には、形容詞「ない」と助動詞「ない」「ぬ」に代表される否定語が使われている。そして、形容詞の「ない」は、たとえば、「手本がない（ある）」「清潔でない（ある）」「寒くない（寒い）」のように、存在・指定・状態を否定し、助動詞の「ない」「ぬ」は、たとえば、「行かない（行く）」「帰らぬ（帰る）」のように動作を否定する。しかも、「ない」は終止形・連体形の連母音が長音化して「ねえ」となり、「ぬ」も母音が無声化して「ん」となり、「ない」「ぬ」と並行して使用されている。そこで、存在・指定・状態の否定表現体系と動作の否定表現体系はどのようなものであったか、終止形・連体形の「ない」と「ねえ」、「ぬ」と「ん」の用法を手がかりとして、その実態を明らかにしてみたいと思う。いいかえれば、第一に、存在・指

定・状態の否定表現は、「ない」と「ねえ」がどのように使い分けられていたか、第二に、動作の否定表現は「ない」と「ねえ」がどのように使い分けられ、また、「ぬ」と「ん」はどのように使い分けられていたか、さらに、「ない・ねえ」と「ぬ・ん」とはどのような関係にあったかを明らかにしたいと思う。そして、終止形に、また連体形に、二つ以上の否定語が存在した理由とその必然性を考えてみたいと思う。

そこで、江戸時代から東京時代への過渡期にあたり、まだ身分意識が残っていた明治初期東京語を反映している仮名垣魯文の『安愚樂鍋』(明治4~5年刊)を資料として、下接語の種類、待遇関係、話し手の身分・職業・性別、活用体系などの観点から、明治初期東京語の否定表現体系の実態を明らかにしてみたいと思う。

『安愚樂鍋』に登場する人物は、身分・職業が武士・職人・商人・遊女など広範囲にわたる点に特色がある。ただ、すべての人物が東京(江戸)生まれとは限らないが、大都市の人口は絶えず流動しているので、全人物を考察の対象とした。主要な登場人物は、およそ次の通りである。

〔男〕

士 40才ぐらい。そうがみ。いずれの旧藩かの公用方。

鄙武士 30才ぐらい。くさたばね。そうがみ。

職人 40才ぐらい。大工か左官らしき風俗。

町人 40才ぐらい。町人てい。いぜん公用方に出入の町人。

商法個 31~32才ぐらい。あきうど。一ミニウトをあらそう商法家。

生文人 31~32才ぐらい。書画会連中。見識は鼻柱とともに高い。

医者 あんまあがりのデモ医者。野だいこ九郎。

あくぬけした人物 34~35才。因循家。旧弊家。

新聞好きの男 にわかざんぎりの西洋ごしらえ。

西洋好きの男 34~35才ぐらい。なでつけかそうはつにでもなるところ。

文盲の男 40才ぐらい。居じょくていいの男。毎晩、軍談の席につめかける常連。

車夫 人力車の車夫。八公。

芝居者 留公。

落語家 22～23才。

野幫間 32～33才。のづ八。のだいこ。口をつばめて物を言うくせあり。

なまけものの男 24～25才。いちょうに結い、円朝まがい。

〔女〕

娼妓 24～25才。田町あたりへたちのきたる、まじりみせのおいらん。

歌妓 28～29才。町芸者。いぜんは、けんばんの下地っ子。

茶店女 20才ぐらい。ころ。

それしゃあがり 50才にちかい。ひき。八百屋半兵衛の母と遣手のおよくと仲居の万野と合併したようなしらばけ婆ア。

なお、『安愚樂鍋』の底本には、国立国会図書館蔵本を使用した。

2. 存在・指定・状態の否定表現体系—形容詞の場合—

2-1 形容詞「ない」「ねえ」の実態

『安愚樂鍋』における形容詞の否定語には「ない（なし）」「ねえ」がある。古語形のナシをナイと一括して扱うと、「ない」は未然形（ナク）、連用形（ナカッ・ナク）、終止形（ナイ・ナシ）、連体形（ナイ）、仮定形（ナケレ）の五活用形に活用し、「ねえ」は終止形（ネエ）、連体形（ネエ）の二活用形がある。そこで、(1)ナイ系、(2)ネエ系の順に、活用形別、下接語別、話し手別にみていくことにしよう。用例は原則として男から女、男は士農工商その他の順とする。また、話し手と聞き手の右の数字は使用度数、用例の右の（ ）内は編丁行を示す。

(1) ナイ系

未然形

〈ナクバ〉

〔薬医者の独語〕 1

○枕金の小鉄をとるかさもなくバ人力車の二挺仕立て吉原へでも（三上21才 6）

連用形

〈ナカッタ〉

〔車夫→同僚〕 1

○きのふほどほねのをれた仕事トシへなかつたヨ (二下12ウ7)

〈ナク〉

〔士→町人〕 3

○かるい重タメいもとんちやくなく定座テイザのしるしでありさへすれば (二下17ウ1)

○鉄錢銅錢入レ交トシて大きいちひさい区別クベツなく波形ハビイがあれば (二下17オ6)

○米が貴カミいとて餓死カモリシテするものもなくさけがたくとも (二下18オ1)

〔町人→士〕 1

○鉄錢より余やるもののがなく文久ムカシを与ればつりを取りますか (二下20ウ2)

〔医者の独語〕 1

○上戸アッコでも下戸シッコでもありきらひなく口をかけてやつた老妓オヤギと合併ガブして (三上21オ1)

〔新聞好きの男→愚助〕 1

○此節都鄙遠近スセツトヒエンジとなく説教セキジョウがおひらきになつて (三下15ウ4)

〈ナクッテ〉

〔歌妓→箱廻 (みのどん)〕 1

○よく～見るとうしじやアなくツて牛皮ウシスのお菓子カクシだらうじやアないか (二下2ウ4)

〔馬→牛〕 1

○うしへものをつみはこびをするけものじやアなくツてひとのくいものになるものだ
(三上7オ11)

〈ナクテ〉

〔町人→士〕 1

○實に西洋流ヨーロッパリュウでなくては夜があけませぬ (二下22ウ1)

〈ナクッチャア〉

〔芝居者→旦那〕 1

○人間ヒトコトへ腹ハラがよくなくツちやア入ハタつかはれやせん (三上13ウ8)

終止形

〈ナイ〉

〔士→町人〕 3

○如何トコロのこともない (二下17ウ7)

○一つの器械キョウギで使トシするやうにひらけるにハ競コギひない (二下21オ8)

○それに東京ばかりちやない (二下22オ1)

〔野賛間 (のづ八) →客〕 1

○きのふやけふのことじやないツ (初17オ 2)

〔茶店女 (ころ) → それしゃあがり (ひき) 〕 1

○牛をたべるのへしらうとじやアない (三下10ウ 7)

〔それしゃあがり→茶店女〕 2

○牡丹や紅葉へあんまり薬ちやアない (三下4オ 3)

○そんなにわるくおいゝでない (三下12オ 3)

〈ナイガ〉

〔士→町人〕 1

○僕などが浅智に分ることでへないが設令華族方が東京住居になられたとて (二下21オ 1)

〔娼妓→茶屋の女中 (おはね) 〕 1

○わるくいふのじやアないが何處の女郎衆だつて (二上13オ 4)

〔それしゃあがり→茶店女 (ころ) 〕 1

○じまんじやアないが山のねへさん達が (三下9オ 8)

〈ナイカラ〉

〔医者の独語〕 2

○足元へもおツ付くことでへないからいゝかげんなごまかしをいゝて (三上18ウ 6)

○薬名ばかり間に行ところもないから病家へまねかれて (三上19オ 8)

〔それしゃあがり→茶店女 (ころ) 〕 1

○薬に豆をやるとしてないからお客なんぞの (三下2オ 5)

〈ナイシ〉

〔あくぬけした男→友先生〕 1

○薬へこのあたりにかくれもないし清元へ (二上17オ 3)

〈ナイテ〉

〔士→町人〕 1

○よく思へば嵩イのでないテ (二下17オ 5)

〔医者の独語〕 1

○愚老なぞが医者の真似をしてゐる處でへないテ (三上18ウ 8)

〈ナイト〉 (「ト」格助詞)

〔医者の独語〕 1

○まぐれ當りといふこともないと勘考して (三上18ウ 1)

〔文盲の男→安さん〕 1

○それを引説にして義一つもないことハツたのが（二下12オ 5）

〔歌妓→箱廻（みのどん）〕 2

○こんなうまいものへないと思ふヨ（二下1ウ 8）

○けしてそんなわけじやアないとことがらが訳かツたから（二下2オ 3）

〈ナイネエ〉

〔歌妓→箱廻〕 1

○ぬれ手であわをつかむやうなことはないねへ（二下7ウ 4）

〈ナイヨ〉

〔娼妓→茶屋の女中（おはね）〕 1

○人力車があるからびく～おしでないヨ（二上14オ 1）

〔歌妓→箱廻（みのどん）〕 1

○児守子がおときによべれたやうにざまへないヨ（二下3オ 7）

〔それしゃあがり→茶店女（ころ）〕 1

○実ハすきのくわのといふだんじやアないヨ（三下2ウ 2）

〈ナシ〉

〔娼妓→茶屋の女中（おはね）〕 1

○トいつてほかにさんだんのしかたもなし年季もきふにやア入れられないし（二上12オ 4）

〈ナシト〉（「ト」格助詞）

〔士→町人〕 1

○開港互市にあらざれば富國強兵の策なしとおもふころになつたぢやテ（二下21ウ 8）

〈ナシニ〉

〔車夫→仲間（力）〕 1

○いさくさなしにはらて着替をきめて（二下14オ 3）

〔歌妓→箱廻（みのどん）〕 1

○三絃なしにうき世ばなしにでもなると（二下3オ 5）

連体形

〈ナイ〉

〔士→町人〕 1

○^節當節とてもあやまちはないはづちやが（二下16ウ6）

〔新聞好きの男→愚助〕1

○^善慧とも^政府でおとがめへないものだとおもふやからが（三下15ウ2）

〔娼妓→茶屋の女中（おはね）〕1

○はたらきのない女郎だとあひそをつかされるのへ（二上10オ7）

〔それしゃあがり→茶店女（ころ）〕1

○まだなじみもないお^方だから（三下2オ7）

〈ナイカ〉

〔士→町人〕1

○ナントたのもしいことてへないか（二下22オ5）

〔娼妓→茶屋の女中（おはね）〕2

○あんまりひけうなひとじやアないか（二上8オ6）

○おはねどんおそくなるとエい、じやアないか（二上13ウ8）

〔歌妓→箱廻（みのどん）〕1

○^牛皮のお^猪子だらうじやアないか（二下2ウ5）

〔茶店女（ころ）→それしゃあがり〕4

○ずいぶんいけるじやアないか（三下1ウ8）

○^脱走してしまつたらうじやアないか（三下4ウ5）

○これでおつもりとしようじやアないか（三下13オ5）

○でもモウそういつたからい、じやアないか（三下13オ6）

〔それしゃあがり（ひき）→茶店女〕2

○おまへもひらけないことをいふ子じやアないか（三下2オ2）

○^門口で出あつたらうじやアないか（三下3ウ2）

〈ナイノ〉

〔それしゃあがり→茶店女（ころ）〕1

○イエそうでないのサ（三下12オ4）

仮定形

〈ナケレバ〉

〔それしゃあがり→茶店女（ころ）〕1

○その氣でなけれバ^生物^{もの}ハ食へないト（三下3ウ7）

〈ナケリヤア〉

〔職人→仲間〕 1

○二分の札がなけりやアびんばうゆるぎもできねへからだで (初23オ 2)

〔新聞好きの男→愚助〕 1

○洋學でなけりやア夜へあけねへヨ (三下14ウ 8)

〔西洋好きの男→客〕 1

○家老のやうな人でなけりやア平人の口へは這入やせんのサ (初7オ 4)

〔野賤間 (のづ八)→客〕 1

○なんでも北里のお茶屋の妻君かさもなけりやア山谷堀あたりの (初19オ 6)

〔歌妓→箱廻 (みのどん)〕 1

○おぎしきでなけりやアふたん着のまゝでいゝから (二下6オ 4)

(2) ネエ系

終止形

〈ネエ〉

〔職人→仲間〕 1

○エ、コウおもしろくもねへ (初22オ 8)

〔文盲の男→安さん〕 1

○うたをよむの候のごん八じやアねへ (二下11オ 6)

〔馬→牛〕 2

○イヤそうでねへ (三上6オ 11)

○がうのめつしる時へねへ (三上7ウ 13)

〈ネエガ〉

〔商法個→商兵衛〕 2

○格別の大商法といふのじやアねへがちつとばかり (三上11ウ 2)

○酔てほらをふくのじやアねへが是までおいらが見込ンだ商法に (三上12オ 7)

〔芝居者→旦那〕 1

○そいつへありが対面曾我五郎のせりふじやアねへが花まちえたる今宵のおほせ (三上17ウ 3)

〈ネエカラ〉

〔職人→仲間〕 1

○しかたがねへからつばへりこんで (初20ウ 7)

〔商法個→商兵衛〕 1

○大商法へ洋航しねへじやア大利がねへから去年あめりかの「サンフランシスコ」の
(三上11ウ6)

〔医者の独語〕 1

○後を見る教盛へねへからこれへ先生と這入こんで (三上20ウ6)

〔あくぬけした男→友先生〕 1

○弁当の手あてもねへから大又をさいそくしたら (二上18オ4)

〔なまけものの男→半ちゃん〕 1

○おいら一人ほかへあがるのもおもしろくなへから野面であがりこんだところが (初
10ウ4)

〈ネエケレド〉

〔職人→仲間〕 1

○色気もそツけもねへけれど附合とくりやア (初22ウ4)

〈ネエシ〉

〔職人→仲間〕 1

○壱升の米へ一日ねへし夜があけてからすがガアと啼きやア (初23オ1)

〈ネエゼ〉

〔商法個→商兵衛〕 1

○地水へ手を出す時じやアねへぜ (三上10ウ2)

〔文盲の男→安さん〕 1

○花清がかうしやくのひき語にいつたがちげへねへぜ (二下10ウ2)

〈ネエト〉 (「ト」格助詞)

〔新聞好きの男→愚助〕 1

○しかし傳聞の誤がねへともいはれねへ (三下16オ5)

〔文盲の男→安さん〕 2

○だから理づめほどこわいものへねへと思ふヨ (二下12ウ1)

○くげのおとしだねにさうゐねへとみんながかんしんしたらう (二下9ウ8)

〔娼妓→茶屋の女中 (おはね)〕 1

○たるづけができたからモウようへねへといふふうで (二上8ウ3)

〈ネエト〉 (「ト」接続助詞)

〔野幫間 (のづ八) →客〕 1

○こんどへあなたとでもおともでねへと見つかりやアどんなめにあふか (初18ウ6)

〈ネエヨ〉

〔商法個→商兵衛〕 1

○開化の人物ヒヤアねへヨ (三上12オ 6)

〔馬→牛〕 1

○くるまをひく身の上じやアねへヨ (三上 6オ12)

〔茶店女 (ころ) →それしゃあがり (ひき) 〕 1

○ホンニおひきさんへ欲がねへヨ (三下12ウ 8)

〈ネエワエ〉

〔職人→仲間〕 1

○おそれるのじやアねへへトイゝがゝりやア (初23ウ 4)

連体形

〈ネエ〉

〔職人→仲間〕 2

○あの勘次の野郎ほど附合のねへまぬけへ (初20ウ 1)

○南京采とかての飯ハ喰ツたことがねへ勇だ (初23オ 5)

〔商法個→商兵衛〕 1

○ア、いくちのねへお合ダ (三上12ウ 6)

〔なまけものの男→半ちゃん〕 1

○かけがへのねへ大稽幣をとうへ一枚こすらせられたぜ (初13ウ 8)

〔歌妓→箱廻 (みのどん) 〕 1

○それでげいしやもねへもんだハ子 (二下 3ウ 4)

〈ネエカ〉

〔職人→仲間〕 1

○松てめへにしたとこがさうじやアねへか (初23ウ 6)

〔商法個→商兵衛〕 1

○急に賛手へねへか子 (三上 9ウ 2)

〔あくぬけした男→友先生〕 2

○大わらひのはなしじやアねへか (二上18オ 7)

○なんぞ新きやうげんのたねになるはなしへねへかと賛出しに来ると (二上19オ 6)

〔新聞好きの男→愚助〕 1

○ナントおかしい奴があるもんちやアねへか子 (三下20オ 3)

〔文盲の男→安さん〕 3

- みんながかんしんしたらうじやアねへか (二下10ウ 1)
- すぐに針がてるといふからふしきじやアねへか (二下10ウ 8)
- おそれいつたもんじやアねへか (二下12オ 8)

〔なまけものの男→半ちゃん〕 3

- おいらに^出ツくわせたらうじやアねへか (初10ウ 6)
- エ、コウ。い、じやアねへか。 (初11ウ 6)
- 一トばんもか、したことがあるめへじやアねへか (初12ウ 3)

〔馬→牛〕 1

- 人間に^生れかへるどうりじやアねへか (三上7ウ 7)

〔歌妓→箱廻 (みのどん)〕 1

- まだい、じやアねへか (二下7ウ 6)

〈ネエノ〉

〔商法個→商兵衛〕 1

- ^五分もはずれたことのねへのへそこが (三上12オ 8)

2-2. 形容詞「ない」と「ねえ」の否定表現体系

以上の結果を整理すると、形容詞「ない」と「ねえ」の実態は第1表のよう

第1表

	使 用 度 数			使 用 者 数	
	ナイ	ネエ	計	ナイ	ネエ
未然	1		1	1	
連用	11		11	8	
終止	28	25	45	10	12
連体	15	19	34	6	8
仮定命令	6		6	6	
計	61	44	105	16	13

になる。ナイは五活用形（古語形ナシは終止形のみ）、ネエは二活用形である。そこで、終止形と連体形のナイとネエの使用度数を比較すると、使用者数との関係からみて、ほぼ同じように使用されている。

そこで、ナイとネエの終止形と連体形は、どのように使い分けられているか、あるいは、共通した用法をもっているかどうかを、下接語の種類、待遇関係、話し手の位相、

活用体系、の面から考察してみよう。

2-2-1 下接語の種類

終止形と連体形の下接語を整理すると次のようになる。

〔終止形の場合〕

ナイ……ガ・カラ・シ・テ（終）・ト（格）・ネエ・ヨ・（終止用法）

ナシ……ト（格）・ニ・（終止用法）

ネエ……ガ・カラ・ケレド・シ・ゼ・ト（格）・ト（接）・ヨ・ワエ・（終止用法）

〔連体形の場合〕

ナイ……カ・ノ・（連体用法）

ネエ……カ・ノ・（連体用法）

終止形の場合、ナイは終止用法のほかに7種の下接語がつき、ナシは2種、ネエは9種の下接語がある。そして、ナシの下接語が少ないので、この活用形の用法が制限されていることを示すものであろう。連体形の場合、連体用法のほかに、ナイは2種、ネエも2種で全く同じである。そこで、終止形の場合について、その下接語を比較すると、

(I) ナイ・ナシ・ネエ共通……ト（格）

(II) ナイ・ネエ共通……ガ・カラ・シ・ヨ

(III) ナイ専用……テ・ネエ

(IV) ナシ専用……ニ

(V) ネエ専用……ケレド・ゼ・ト（接）・ワエ

となる。(I)と(II)の共通の下接語は、格助詞(ト)、接続助詞(ガ・カラ・シ)、終助詞(ヨ)で、いずれも基本的下接語である。専用の場合についてみると、(III)ナイ専用のテは〔士→町人〕、ネエは〔歌妓→箱廻〕へ使用され、上→下の関係にあり、(IV)ナシ専用のニは〔車夫→仲間〕と〔歌妓→箱廻〕に対等か上→下の関係で、(V)ネエ専用のケレドは〔職人→仲間〕、ゼは〔商法個→商兵衛〕、ト(接)は〔野幫間→客〕、ワエは〔職人→仲間〕へ使われ、対等か下→上の関係で、相違がみられる。そこで、話し手と聞き手との関係について考察してみよう。

2-2-2 待遇関係

上下の関係が明らかな話し手と聞き手の関係(対等の関係は除く)をみると、次のようになる。

〔ナイの場合〕

上→下の関係 士→町人…ナイ（終止用法）・ナイガ・ナイテ・ナイ（連体用法）・ナイカ

娼妓→茶屋の女中…ナイガ・ナイヨ・ナイ（連体用法）・ナイカ

歌妓→箱廻…ナイト・ナイネエ・ナイヨ・ナイカ

下→上の関係 野幫間→客…ナイ（終止用法）

〔ナシの場合〕

上→下の関係 士→町人…ナシト

娼妓→茶屋の女中…ナシ（終止用法）

歌妓→箱廻…ナシニ

〔ネエの場合〕

上→下の関係 娼妓→茶屋の女中…ネエト

歌妓→箱廻…ネエ（連体用法）・ネエカ

下→上の関係 芝居者→旦那…ネエガ

野幫間→客…ネエト

ナシは上→下の関係で逆がないが、ナイとネエは上→下の関係でも下→上の関係でも用いられている。そして、これらのほかの話し手と聞き手とは対等の関係にある。そこで、ナシの場合は用例数が少いので保留すると、ナイとネエの終止形と連体形は、敬意・丁寧あるいは軽卑の待遇意識を表わすことはなかったものと考えられる。待遇意識を示したのは、デ・ゼ・ワエなどの終助詞と考えてよいであろう。

2-2-3 話し手の位相

そこで、話し手の身分・職業・性別との関係をみていくことにしよう。まず、話し手を性別と身分によって分類すると次のようになる。なお、身分のはつきりしない人物は〔他〕として扱い、話し手が終止形と連体形を使用していない場合には*印をついた。

〈男〉 〔士〕 1 士

〔工〕 1 職人

〔商〕 2 商人・*町人

〔他〕 10 蔵医者・新聞好きの男・あくぬけした男・文盲の男・芝居者
・野幫間・なまけものの男・馬・車夫・西洋好きの男

〔女〕 4 媚妓・歌妓・茶店女(ころ)・それしゃあがり(ひき)

この分類によって、ナイ系とネエ系の使用度数をみると、第2表のようになる。終止・連体形は、〔士〕はナイ・ナシ専用、〔工〕〔商〕はネエ専用であって、ここに身分のちがいがあらわれている。

第2表

		使 用 度 数	身分別使用度数				使 用 者 数				使 用 者 数
			士	工	商	他	女	士	工	商	
未然	ナク	1				1			1		1
連用	ナカッ	1				1			1		1
	ナク	10	3	2	4	1		1	1	4	1
終止	ナイ	24	5		7	12		1		4	4
連体		15	2		1	12		1		1	4
終止	ナシ	4	1		1	2		1		1	2
終止	ネエ	25	5	5	13	2		1	1	8	2
連体		19	3	3	11	2		1	1	5	1
仮定	ナケレ	6		1	3	2		1	3	2	6

そこで、〔他〕と〔女〕について、(I)ナイ・ナシ専用、(II)ネエ専用
(III)ナイ・ナシ・ネエ混用を基準に分類すると、〔他〕は、

(I)ナイ・ナシ専用 1 車夫

(II)ネエ専用 3 芝居者・なまけものの男・馬

(III)ナイ・ナシ・ネエ混用 5 蔵医者・あくぬけした男・新聞好きの男
・文盲の男・野幫間

となり、〔女〕は

(I)ナイ・ナシ専用 1 それしゃあがり(ひき)

(III)ナイ・ナシ・ネエ混用 3 媚妓・歌妓・茶店女(ころ)

となる。

そこで、終止形と連体形を基準として、(A)ナイ・ナシ専用者 (B)ナイ・ナシ・ネエ混用者 (C)ネエ専用者 (D)終止形・連体形不使用者に

分けると、

〈男〉

(A) ナイ・ナシ専用者

〔士〕士

〔他〕車夫

(B) ナイ・ナシ・ネエ混用者

〔他〕歎医者・あくぬけした男・新聞好きの男・文盲の男・野替間

(C) ネエ専用者

〔工〕職人

〔商〕商法個

〔他〕芝居者・なまけものの男・馬

(D) 終止形・連体形の不使用者

〔商〕町人

〔他〕西洋好きの男

〈女〉

(A) ナイ・ナシ専用者

〔女〕それしゃあがり（ひき）

(B) ナイ・ナシ・ネエ混用者

〔女〕娼妓・歌妓・茶店女（ころ）

とグループ化できる。なお、車夫は (A) に入るが、ナシ 1 例による基準で分類されているので、これを保留すると、男の (A) ナイ・ナシ専用者と (C) ネエ専用者の間には明らかな身分・職業のちがいがみられ、(B) ナイ・ナシ・ネエ混用者は、この両者の中間に位置するものと解釈される。そして、そこには教養のちがいもみられる。女は、50 才にちかいそれしゃあがりの「ひき」が、他の若い女との間に使用差を示している。性別では、女にネエの専用者がみえないが、これは話し手にかたよりがあるためであろうか。

2-2-4 活用体系

以上の分類基準によって、人物別・活用形別にナイ系とネエ系の使用状態をみると、第 3 表のようになる。

第3表

性別	身分・職業	活用形 話し手	ナ	ナ	ナ	ナ	ネ	ナ	計
			カク	カック	イ	シ	エ	ケレ	
		未然形	連用形	終止形	連体形	終止形	連体形	仮定形	
男	(A) 士			3	5 2	1			11
	医者	1	1	4			1		7
	あくぬけした男			1			1 2		4
	(B) 新聞好きの男		1	1		1 1	1	1	5
	文盲の男			1		4 3			8
	野幫間		1			1	1	1	3
	職人					5 3	1		9
	(C) 商法個者					5 3			8
	芝居者	1				1			2
	なまけもの					4			4
	馬	1				3 1			5
女	(D) 町人		2						2
	西洋好きの男				1			1	1
	車夫	1							2
	(A) それしゃあがり(ひき)			5 4			1	10	
	娼妓			2 3	1	1			7
	(B) 歌妓		1	4 1	1		2 1	10	
	茶店女(ころ)			1 4		1			6
	計	1	1 10	24 15	4	25 19	6	105	

すなわち、全活用体系で比較すると、(A)ナイ系専用者と、ナイ系とネエ系の共用者で、(B)未然・連用・終止・連体・仮定の五活用形にナイを用い、しかも終止・連体形にネエ系を並用するものと、(C)未然・連用・仮定の三活用形がナイ系で、終止・連体の二活用形がネエ系で、相補う関係になっている場合がある。そして、その違いが、身分や職業の違いをあらわしており、これが明治初期東京語における存在・指定・状態の否定表現体系である。そして、このような言葉の違いが、逆に、封建的身分制を成立させていたものであり、その存在理由であったと考えられる。

3. 動作の否定表現体系——助動詞の場合——

動作の否定を表現するには、助動詞「ない」「ねえ」「ぬ」「ん」が用いられるが、まず、「ない」と「ねえ」と、「ぬ」と「ん」との場合に分けてその実態を明らかにし、それから両者の関係をみることにしよう。

3-1. 助動詞「ない」「ねえ」の実態

助動詞「ない」は連用形（ナカッ・ナク・ナン），終止形（ナイ），連体形（ナイ），仮定形（ナケレ）の四活用形があり、長音化した「ねえ」は、終止形（ネエ），連体形（ネエ）の二活用形がある。そこで、(1)ナイ系，(2)ネエ系に分け、それぞれを活用形別・下接語別・人物別にみていくことにしよう。なお、過去の打消をあらわす「 NANDA 」は「ナン」+「タ」として扱った。

(1) ナイ系

連用形

〈ナカッタ〉

〔西洋好きの男→客〕 1

○こんな清潔なものをなぜ今まで喰へなかつたのでごウせう（初7オ1）

〔文盲の男→安さん〕 1

○翁といふものハートつぶもふらなかつた時（二下11オ8）

〔芝居者→旦那〕 1

○留公とさしで寂しくツてならなかつたトおつしやツたを（三上16ウ7）

〔茶店女（ころ）→それしゃあがり（ひき）〕 1

○今までおまへにもはなさなかつたが（三下4ウ2）

〔それしゃあがり→茶店女（ころ）〕 1

○まがわるくツてはいられなかつたハ子（三下3オ5）

〈ナク〉

〔娼妓→茶屋の女中（おはね）〕 1

○作さんもだれかにしやくられたと見へて來なくなつてしまふし（二上9オ4）

〈ナクッテモ〉

〔茶店女（ころ）→それしゃあがり〕 1

○アレサとめなくツてもいゝからサ（三下13オ7）

〈ナンダ〉

〔土→町人〕 1

○ハイ僕なぞも矢張因循家のたちであまり肉食ハせなんだが（二下16オ2）

終止形

〈ナイ〉

〔歌妓→箱廻（みのどん）〕 1

○どふしたらよからうエ、かまへない（二下8オ6）

〔茶店女（ころ）→それしゃあがり〕 1

○かまへないはなしてしまふからみんなにへない～（三下9オ4）

〈ナイガ〉

〔娼妓→茶屋の女中（おはね）〕 1

○おまへのうちへへすまないがあひたいむしんをいつて（二上12ウ2）

〔茶店女（ころ）→それしゃあがり〕 1

○仕度ハ別段いらないが身のまはりをかざつてくる手あてが二十両で（三下6ウ3）

〈ナイカラ〉

〔客→娼妓〕 1

○とりこんでゐてあへれないからいづれ茶屋迄たづねるから（二上8ウ7）

〔娼妓→茶屋の女中（おはね）〕 1（注1）

○モウ～あんな小うるせへきやくハつとまらないからことへらうかとおもふとたん
へ（二上9ウ5）

〔歌妓→箱廻（みのどん）〕 1

○わたりものもきさまないからけいしや料理やのためにやあいゝけれども（二下6ウ
3）

〔それしゃあがり→茶店女（ころ）〕 1

○山くじらのうまいはなしをするのでたべたくつてならないから雪がふつて見世をは
やくはねたばんがたに（三下2ウ8）

〈ナイシ〉

〔娼妓→茶屋の女中（おはね）〕 3

○金銀づくであいそをつかされるのへざんねんでならないし。（二上12オ4）

○^{年季}もきふにやア入れられないし (二上12オ 5)

○日のの小づかひにもこまらないしもの日のしまひもしてもらうし (二上12ウ 7)

〈ナイト〉 (「ト」格助詞)

〔娼妓→茶屋の女中 (おはね) 〕 2

○まんざらくめんができないといつてやつたら (二上10オ 7)

○なにのめないとエ (二上14オ 6)

〔新造 (小の町さん) →娼妓〕 1

○てうどいいきれめだからできないといつてことへつておしまひなんし (二上11ウ 2)

〔歌妓→箱廻 (みのどん) 〕 1

○いつまでもうだつへあがらないとおもふから (二下7オ 6)

〔それしゃあがり (ひき) →茶店女 (ころ) 〕 1

○その気でなければ生物せいぶつへ食くへないと内うちへ取とよせてたべたが (三下3ウ 7)

〈ナイト〉 (「ト」接続助詞)

〔歌妓→箱廻 (みのどん) 〕 1

○三日にあげたべないとなんだかからだのくあひがわるいやうだヨ (二下1ウ 4)

〔それしゃあがり (ひき) →茶店女 (ころ) 〕 1

○はじめりをきいてをちをきかないと気になるハ子 (三下8ウ 8)

〈ナイナンゾ〉

〔茶店女 (ころ) →それしゃあがり (ひき) 〕 1

○おひきさんお前まへもうしへたべないとこのあひだ氷月ひづきでおいゝだツたが (三下1ウ 6)

〈ナイヨ〉

〔歌妓→箱廻 (みのどん) 〕 1

○ゆだんもすきもなりやアしないヨ (二下6オ 8)

〔それしゃあがり→茶店女 (ころ) 〕 1

○とうもさきでたべるやうにやアいかないヨ (三下4オ 1)

〈ナイワ〉

〔娼妓→茶屋の女中 (おはね) 〕 1

○五両どころか壹分いつぶんのさんだんもできやアしないハ子 (二上10オ 4)

〔歌妓→箱廻 (みのどん) 〕 1

○どんなにつらいかしれやアしないハ子 (二下7オ 4)

連体形

〈ナイ〉

〔娼妓→茶屋の女中（おはね）〕 1

○初会にもでられないしまつの廻へ（二上9オ5）

〔新造（小の町さん）→娼妓〕 1

○年もいかないわちきの口からしつれいざますけれど（二上11ウ3）

〔歌妓→箱廻（みのどん）〕 3

○かみほとけへ手があへされないといちづに思つてゐたが（二下2オ1）

○みんなが異人なれないもんだから（二下2オ7）

○鶴卵のからがとれもしないおきや阿けいしやのくせをして（二下5ウ7）

〔茶店女（ころ）→それしゃあがり（ひき）〕 3

○一生こまらせないやうにしてやる（三下7オ2）（注2）

○日本にうまれて千里万里さきのあたいもしれない遠人なんぞのなぐさミ物になるの
へ（三下7オ6）

○だれもすゝめもしないくせに（三下10ウ3）

〔それしゃあがり→茶店女（ころ）〕 2

○おころさんおまへもひらけないことをいふ子じやないか（三下2オ2）

○牛のまだはやらないじぶんから（三下2ウ3）

〈ナイカ〉

〔町人→牛店の女中〕 1

○コレへーあねへ（中略）鍋が煮ついたからとりかへてくれないか（二下22ウ5）

〈ナイジャア〉

〔歌妓→箱廻（みのどん）〕 1

○それでもしらないぢやあくやしいと思ふので（二下4オ8）

〈ナイデ〉（注3）

〔音ちゃんの使い→娼妓〕 1

○お音ちゃんのとこから（中略）頭取であひとの一座だから金がたりないでひよつと
はぢをかくといけないから（二上9ウ8）（注4）

〈ナイノ〉

〔歌妓→箱廻（みのどん）〕 1

○ヤレあのお座敷へでられないのとサ（二下2ウ7）

〔茶店女（ころ）→それしやあがり〕 2

○それがひらけないのだとすゝめられると（三下5オ7）

○今^{ホトト}の世^セせかいにありもとへつかないのハヤボのゆきどまりで（三下5オ7）

仮定形

〈ナケレバ〉

〔生文人→仲間〕 1

○先生が出て給へらなければ枕山（中略）の諸先生たちが（初25オ1）（注5）

〔歎医者の独語〕 1

○洋薬の名目も口元だけへおほへなければならんが（三上19オ6）

（2）ネエ系

終止形

〈ネエ〉

〔新聞好きの男→客〕 1

○^{伝聞}の誤がねへともいへれねへ（三下16オ5）

○^筒の役にもたちやアしねへ（三下20オ5）

〔あくぬけした男→友先生〕 1

○^面でばかりへいろへしねへ（二上18ウ5）

〔なまけものの男→半ちゃん〕 2

○^{金散財}にやア^代られねへ（初11ウ1）

○組で八十^ノタヘツづかねへ（初13ウ3）

〔野^ノ替間→客〕 1

○見かけねへかほだがどうもわからねへ（初19オ8）

〔牛→馬〕 1

○ア、^牛のねもでねへ（三上7ウ13）

〔それしやあがり（ひき）→茶店女（ころ）〕 1

○うまくいゝましツケへ、ンあきれもしねへ（三下12ウ4）

〈ネエガ〉

〔あくぬけした男→友先生〕 1

○そこまでにやアいたらねへがこりやアきつと^{奇妙}だヨ（二上16ウ5）

〈ネエカラ〉

〔商法個→商兵衛〕 1

○手を広げることができねへから (三上11ウ1)

〔西洋好きの男→客〕1

○兎理學を弁へねへからることでゲス (初7ウ2)

〔あくぬけした男→友先生〕1

○洋ふくのさんだんもできねへから半髪あたまをたゝかれてるるのだが(二上15オ2)

〔文盲の男→安さん〕1

○やまぶきといふ物ハ花がさいても実がならねへからることをひきだしたのハ (二下12オ7)

〔なまけものの男→半ちゃん〕2

○さきがこわがツテ箱手にしねへから鳴ばらへでも巣をかへやうとおもツてゐるのサ (初12ウ1)

○おもしろいあそびへできねへからずつと世界を (初13オ7)

〔芝居者→旦那〕1

○しみつたれな樹ハ植込まねへからおのづから (三上13ウ6)

〈ネエケリヤア〉

〔商法個→商兵衛〕1

○人ハ大きなことをのぞまねへけりやア開化の人物じやアねへヨ (三上12オ6)

〈ネエゼ〉

〔あくぬけした男→友先生〕1

○物知りだのといへれてうるさくつてならねへぜ (二上19ウ3)

〈ネエダ(ロウ)〉

〔職人→仲間(松)〕1

○酒を見かけちやアにげられねへだらう (初20ウ7)

〈ネエト〉(「ト」格助詞)

〔馬→牛〕1

○すべてせうあるものハそれへー御奉公をせにやアならねへとある先生がおつしやつたのを (三上7ウ2)

〈ネエト〉(「ト」接続助詞)

〔商法個→商兵衛〕1

○おいらア神戸へ行かねへと爰でいくらも賣ふのだけれど (三上10ウ6)

〔それしゃあがり(ひき)→茶店女(ころ)〕1

○^おちがふねへと^お馬道のぬけうらあたりへそれられたり（三下12ウ6）

〈ネエヨ〉

〔商法個→商兵衛〕2

○はじめての牛店^おなぞへめつたにはいらねへヨ（三上8ウ2）

○そんな不勉強じやアもうからねへヨ（三上12ウ5）

〔新聞好きの男→愚助〕1

○洋学^おでなけりやア夜へあけねへヨ（三下14ウ8）

〔なまけものの男→半ちゃん〕1

○彼等^おはどうも友を呼^よでならねへヨ（初13ウ5）

〈ネエワ〉

〔文盲の男→安さん〕1

○百姓^おのむすめでもばかにやアならねへハサ（二下12オ6）

連体形

〈ネエ〉

〔職人→仲間（松）〕1

○二分^おの札^さがなけりやアびんばうゆるぎもできねへからだで（初23オ3）

〔商法個→商兵衛〕4

○いくら噛^かンでもちぎれねへ呑^の莫^まくなツた老牛^{おの}を食^くへせられたので（三上9オ3）

○ばつとしねへうち賣^うイ返^かむのだぜ（三上10ウ5）

○佳^よくい^よけ一^いしほのおなぐさミだがまつ頼^{たの}ハしねへつもりサ（三上11ウ3）

○大六や伊勢勝^い勝^{かつ}なんぞにもおとらねへ身生^みに成^なツて（三上12オ3）

〔西洋好きの男→客〕2

○ひらけねへ奴等^おが肉食^{にく}をすりやア（初7オ8）

○ヤレ織^{おり}れるのとわからねへ野暮^{のま}をいふのは（初7ウ1）

〔芝居者→旦那〕1

○三町ながら飾^かり物^{もの}へしねへなかで（三上14オ2）

〔落語家→若旦那〕4

○エモシひらけねへ手あひじやアごぜへせんか（三上23オ6）

○私もしかにならねへ前^{まへ}方^{かた}有^あ人の弟子^しぶんになりやして（三上24ウ8）

○高座^{たか}の前^{まへ}で訳^{わけ}りもしねへくせに悪口^{あく}をきいたり（三上25オ4）

○若^わだんなもあんまりあがらねへ方^{かた}だから（三上25オ8）

〔落語家→牛店の女中〕 1

○気がきかねへ少女ダ (三上22ウ7)

〔野幫間→客〕 1

○堀じやア見かけねへかほだが (初19オ7)

〔牛→馬〕 1

○うまれてものごゝろがつくかつかねへうちに (三上6オ8)

〔馬→牛〕 2

○ひさしくあへねへうちてめへたいそうしゆつせして (三上6オ2)

○まだにんげんがひらけねへところから (三上6ウ5)

〈ネエカ〉

〔商法個→商兵衛〕 2

○どうだおめへ貰へねへか (三上9ウ7)

○それよりハ赤銅を貰つて見ねへか (三上10ウ3)

〔唐物屋の番頭→車夫〕 1

○大いそきて川はたまでやらねへか (二下13オ7)

〔あくぬけした男→友先生〕 1

○ヲヤおめへへべらい先生をしらねへか (二上17ウ8)

〔なまけものの男→半ちゃん〕 1

○甲子屋のしん造衆が客のくるかこねへかを (初13オ5)

〈ネエジャア〉

〔商法個→商兵衛〕 2

○爰で代物を楮幣に引替ねへじやア (三上9ウ5)

○大商法ハ洋航しねへじやア大利がねへから (三上11ウ6)

〔落語家→若旦那〕

○荷でも牛をやらねへじやアすこやかにやアいきやせん (三上23オ2)

〈ネエデ〉

〔商法個→商兵衛〕 2

○イヤ事訓ねへで下女なんぞがからツきし半間で (三上8ウ7)

○替りに手を付ねへでかんぢやうをして (三上9オ5)

〈ネエノ〉

〔西洋好きの男→客〕 1

○^{トトロ}神仏へ手が合^ハされねへのヤレ^ハ穢^ハれるのと (初7ウ1)

〔新聞好きの男→愚助〕 2

○^{トトロ}支那風でいふから解^ハさねへのもむべなり～ (三下14オ6)

○^{トトロ}西洋のはなしなぞへできねへのサ (三下20オ7)

3-2 助動詞「ない」「ねえ」の否定表現体系

以上の結果を整理すると、第4表のよう

第4表

になる。終止形と連体形のナイとネエは、使用者数からみて終止形のナイの使用度数が高いほかはほぼ同じように使用されている。そこで、ナイとネエの終止形と連体形がどのように使い分けられているか、また、共通した用法をもっているかどうか考察してみよう。

	使 用 度 数			使 用 者 数	
	ナイ	ネエ	計	ナイ	ネエ
未然					
連用	8		8	7	
終止	23	27	50	6	12
連体	18	30	48	7	12
仮定	2		2	2	
命令					
計	51	57	108	12	14

3-2-1 下接語の種類

まず、終止形と連体形の下接語についてみると、次のようになる。

〔終止形の場合〕

ナイ……ガ・カラ・シ・ト (格) ・ト (接) ・ナンゾ・ヨ・ワ・ (終止用法)
ネエ……ガ・カラ・ケリヤア・ゼ・ダ・ト (格) ・ト (接) ・ヨ・ワ・ (終止用法)

〔連体形の場合〕

ナイ……カ・ジャア・デ・ノ・ (連体用法)
ネエ……カ・ジャア・デ・ノ・ (連体用法)

終止形の場合は、終止用法のほか、ナイは8種の下接語がつき、ネエは9種が下接する。連体形の場合は4種が下接して、全く同じである。そこで、終止形の場合の下接語を比較すると、

- (I) ナイ・ネエ共通……ガ・カラ・ト (格) ・ト (接) ・ヨ・ワ
- (II) ナイ専用……シ・ナンゾ

(III) ネエ専用……ケリヤア・ゼ・ダ

となる。すなわち、共通は6種、ナイ専用は2種、ネエ専用は3種である。そして、ナイ・ネエ共通の下接語は、格助詞(ト)、接続助詞(ガ・カラ・ト)、終助詞(ヨ・ワ)で、いずれも基本的な下接語である。連体形もいずれも同じ下接語で基本的な下接語である。専用の中では、ケリヤアは今日用いられなくなったもので、ナイケレバがネエケリヤアと音変化したものである。ナイ系にはナケレバが使用されているので比較すると、ナケレバは〔生文人→仲間〕〔医者の独語〕で用いられ、ネエケリヤアは〔商法個→商兵衛〕の関係で使っており、話し手の職業と教養の差があらわれている。

3-2-2. 待遇関係

そこで、話し手と聞き手との関係をみると、上下関係の明らかなのは、
〔ナイの場合〕

上→下の関係 嬉妓嬉しい→茶屋の女中 ナイガ・ナイカラ・ナイシ・ナイト・
ナイワ・ナイ (連体用法)

下→上の関係 新造→娼妓 ナイト・ナイ (連体用法)

〔ネエの場合〕

上→下の関係 落語家→牛店の女中 ネエ (連体用法)

下→上の関係 芝居者→旦那 ネエカラ・ネエ (連体用法)

落語家→若旦那 ネエジャア・ネエ (連体用法)

野替間→客 ネエ (終止用法)・ネエ (連体用法)

の通りで、ナイ系もネエ系も、いずれも上→下、下→上の関係で用いられている。したがって、終止形・連体形において、ナイとネエとは待遇を示すことはなかったものと考えられる。

3-2-3. 話し手の位相

そこで、話し手の身分・職業・性別との関係をみてみよう。『安愚樂鍋』の話し手を性別と土農工商の身分の明らかな人と、その他に分けてみると次のようになる。

〈男〉 [工] 1 職人

〔商〕 3 町人・商法個・唐物屋の番頭

〔他〕 12 新聞好きの男・あくぬけした男・西洋好きの男・芝居者・落語家・野賛間・文盲の男・なまけものの男・牛・馬・^{*}生文人・

^{*} 蔽医者 (*印は終止・連体形を使用していない)

〔女〕 〔女〕 5 嬉妓・新造・歌妓・それしゃあがり (ひき)・茶店女 (ころ)
このグループにしたがって使用度数をみると、第5表のようになる。

第5表

		使用度数	身分別使用度数		身分別使用者数		使用者数
			士	工	商	他	
連用	ナカツ	5			3 2		5
	ナク	2			2		2
	ナン	1	1		1		1
終止連体	ナイ	22			22		5
		15		1	14	1	5
終止連体	ネエ	27	1	5	19 2	1 1	12
		30	1	11	18	2 9	12
仮定	ナケレ	2			2	2	2

すなわち、助動詞の終止形・連体形において〔士〕は使用していないので、〔工〕〔他〕がネエ専用で、〔商〕〔女〕がナイ・ネエ共用である。なお、〔商〕のナイ使用者は町人でネエを使用しておらず、「いざれかの大藩の公用方」であった武士と話している人物で、〔商〕とはいえ商法個とは比較にならない大商人のようである。この人物を別(注6)とすれば、〔工〕〔商〕がネエ専用となり、形容詞の場合と同様に、〔士〕と〔工〕〔商〕とでは身分差がことばに反映しているものと考えられる。いいかえれば、ナイとネエは、待遇をあらわすのではなく、話し手の身分を表わすものと考えられる。〔女〕は、それしゃあがり(ひき)がナイ・ネエ共用で、ほかの娼妓・新造・歌妓・茶店女(ころ)はナイ専用である。

そこで、終止形・連体形を基準として (A) ナイ専用者 (B) ナイ・ネエ共用者 (C) ネエ専用者 (D) 終止形・連体形を使用していない人 に分けると次のようになる。

〈男〉

(A) ナイ専用者
〔商〕町人

(B) ナイ・ネエ共用者
(なし)

(C) ネエ専用者
〔工〕職人
〔商〕商法個・唐物屋の番頭
〔他〕あくぬけした男・新聞好きの男・西洋好きの男・文盲の男・芝居者・落語家・野幫間・なまけものの男・牛・馬

(D) 終止形・連体形を使用しない人
〔士〕士
〔他〕生文人・歎医者

〈女〉

(A) ナイ専用者
〔女〕娼妓・新造・歌妓・茶店女(ころ)

(B) ナイ・ネエ共用者
〔女〕それしゃあがり(ひき)

この基準によってナイとネエの使用者をグループ化すると、その実態は第6表のようになる。

すなわち、終止形と連体形は、男はネエ、女はナイが圧倒的で、男女差が明確にあらわれている。また、男は、〔士〕および教養人の(D)が終止形・連体形を使用していない点が注目される。

3-2-4 活用体系

なお、活用体系からみると、男は(A)ナイ系の町人と、(C)ナイ系(未然・連用・仮定)とネエ系(終止・連体)の相補う体系とがあり、女は、(A)ナイ系と、(B)ナイ系(連用・終止・連体)とネエ系(終止)との混用系がある。

そこで、同じ否定をあらわす助動詞「ぬ」「ん」について見てみることにしよう。

第6表

性別	身分・職業	活用形 話し手	ナカツ	ナク	ナン	ナイ	ネエ	ナケレ
			連用形	終止形	連体形	終止形	連体形	仮定形
男	(A) 町人				1			
	職人					1 1		
	商法個				5 10			
	唐物屋の番頭				1			
	あくぬけした男				4 1			
	新聞好きの男				3 2			
	西洋好きの男	1			1 3			
	(C) 文盲の男	1			2			
	芝居者	1			1 1			
	落語家				6			
	野間				1 1			
	なまけものの男				5 1			
	牛馬				1 1			
	(D) 士人		1					
	生文人					1		
女	(A) 妓妓		1	8 1				
	新造妓			1 1				
	歌舞妓			6 4				
	茶店女(ころ)	1 1		3 5				
	(B) それしゃあがり(ひき)	1		4 2	2			

3-3 助動詞「ぬ」「ん」の実態

助動詞「ぬ」は連用形(ズ)、終止形(ヌ)、連体形(ヌ)、仮定形(ネ)の四活用形があり、「ん」は終止形(ン)、連体形(ン)の二活用形がある。ただ、「ぬ」「ん」は常体と敬体とで用いられるので、〔常体〕(1)ヌ系、(2)ン系、〔敬体〕(3)マセヌ系、(4)マセン系、(5)ヤセン系、(6)セシ系に分けてみていくことにする。なお、「ごうせん」は「ごぜえせん」の省略形と考え、「セン系」に

扱った。

(1) ヌ系

連用形

〈ズ〉

〔士→町人〕 2

○そのかたちの大きい小さいに不関係かるい董いもとんぢやくなく (二下17ウ1)
○紡績の工ハすこしもこゝろえずたじやうるりやをどりなどの遊藝のミをこのんで
(二下18オ8)

〔歌妓→箱廻 (みのどん) 〕 2

○しまひまでまんそくにハひけずダがすミも (二下3ウ1)
○三日にあげずたべないとなんだかからだのくあひがわるいやうだヨ (二下1ウ4)

〈ズト〉

〔それしやあがり→茶店女 (ころ) 〕 1

○まアよさずといゝからあとをおはなしヨ (三下8ウ7)

〈ズニ〉

〔士→町人〕 1

○金銀銅鉄の精密な比例も知らずに鉄錢銅錢入レ交て (二下17オ6)

〔町人→士〕 2

○肉食へけがれるものとおぼへましてとんと用ひすにをりましたが (二下16オ8)
○日本へわたらすにすみましたと見へますテ (二下16ウ3)

〔あくぬけした男→友先生〕 1

○コレサほんやりしずにモウいつペゑやらかしねへ (二上19ウ6)

〔文盲の男→安さん〕 1

○山ぶきの花をほんへのせて持ツてきてものもいへずに出すと (二下12オ1)

〔車夫→同僚 (力) 〕 2

○ねもきめずにすぐにのせたハ (二下13オ8)

○とこもしかずに寝てしまつたが (二下15オ2)

終止形

〈ヌガ〉

〔生文人→仲間〕 1

○それハ偶の附合だから止を得ぬが明日ハ (初26オ6)

〈ヌテ〉

〔士→町人〕 1

○そのまゝにへすておかれぬテ (二下17ウ 5)

連体形

〈ヌ〉

〔生文人→仲間〕 1

○書面会へへ出ぬことゝきめたが (初24オ 7)

〈ヌデ〉

〔士→町人〕 1

○やがて入手かたらぬでこまるやうになるであらう (二下21オ 6)

〈ヌモ〉

〔士→町人〕 1

○^{國の}外國の実情を知らぬもふじゆうで (二下21ウ 4)

仮定形

〈ニヤア〉

〔薦医者の独語〕

○すくんでばかりおらにやアならん (三上19ウ 2)

〔馬→牛〕 1

○それへへ御奉公をせにやアならねへとある先生がおつしやつたのを (三上7ウ 2)

〈ネバ〉

〔士→町人〕 1

○三日用ひねバ工合がわるいやうちやから (二下16オ 4)

(2) ン系

終止形

〈ン〉

〔生文人→仲間〕 1

○爰にも足をとめるどがならん (初26オ 6)

〔薦医者の独語〕 2

○すくんでばかりおらにやアならん (三上19ウ 3)

○ちゝむさい病人なぞを煮焼かへしにへしておられん (三上21ウ 4)

〈ンガ〉

〔薬医者の独語〕 1

○洋薬の名目も口元だけへおぼへなければならんが髪くひそらして（三上19才 6）
〈ンカラ〉

〔生文人→仲間〕 1

○三幅對の山水を郎席にした、めんければならんからチトつきあひへはづすじやが
(初26才 8)

〔薬医者の独語〕 1

○直に脱走もきめられんから談合して見たところが（三上18才 4）
〈ンケレバ〉

〔生文人→仲間〕 1

○三幅對の山水を郎席にした、めんければならんから（初26才 8）

〔薬医者の独語〕 1

○あやうい橋も渡らんければまぐれ當りといふこともない（三上18才 8）
冲体

〈ン〉

〔生文人→仲間〕 1

○なにか呑たらんやうじやによつて牛店ときめたへ（初26才 2）（注6）
〈ンカ〉

〔鄙武士→牛店の女中〕 2

○女子一寸乗ンか（初15才 7）

○生の和味のをいま一皿くれンか（初14才 6）

(3) マセヌ系

終止形

〈マセヌ〉

〔町人→士〕 2

○貧いやら貧いやら條理がわかりませぬ（二下19才 8）

○西洋流でなくて夜があけませぬ（二下22才 1）

〈マセヌガ〉

〔町人→士〕 2

○此味をおぼへましたらわすられませぬが當夏の新聞に出ましたリンテルポーストと
やらの（二下16才 1）

○おなじわりに はまゐりませぬが 工匠の 作料諸職の 手間も (二下20オ 7)

〈マセヌテ〉

〔町人→士〕 1

○さほどにこまるはづへござりませぬテ (二下20ウ 1)

(4) マセン系

終止形

〈マセン〉

〔牛店の女中→商法個〕 1

○昆布へござりません (三上9オ 1)

〈マセンカラ〉

〔芝居者→旦那〕 1

○此頃へ 助べゑありませんから 牛肉の 効能が 見へやすめへ (三上17オ 4)

〈マセンゼ〉

〔芝居者→旦那〕 1

○おいらんのむかふ 腹へいへせませんぜ (三上17オ 8)

〔野賛間→客〕 1

○ミやうりのわるいお 等へごぜへませんぜ (初19ウ 7)

連体形

〈マセンカ〉

〔芝居者→旦那〕 1

○いゝおもひつきじやアごぜへませんか (三上13オ 6)

(5) ヤセン系

終止形

〈ヤセン〉

〔西洋好きの男→客〕 2

○ほたんや 紅葉へくへやせん (初6ウ 8)

○夏でも 雪が降つたり 氷が張るので 往來ができやせん (初9オ 5)

〔芝居者→旦那〕 2

○人間へ 腹がよくなく つちやア 人へつかはれやせん (三上14オ 1)

○動きやア とれやせん (三上14オ 8)

〔落語家→若旦那〕 3

○牛をやらねへじやアすこやかにやアいきやせん (三上23オ 2)

○高座でどんなにかしやべりい、かしれやせん (三上23ウ 3)

○夜席がつとまりやせん (三上23ウ 5)

〈ヤセンガ〉

〔芝居者→旦那〕 1

○おめへさんのお顔だからしかたも有やせんが此頃ハ (三上17オ 4)

〔落語家→若旦那〕 1

○客のあたまの減る氣づけへへござりやせんが初日から (三上23ウ 6)

〈ヤセンヨ〉

〔野賛間→客〕 1

○どんなめにあふかしれやせんヨ (初18ウ 6)

連体形

〈ヤセンカ〉

〔芝居者→旦那〕 2

○見物の腹をゑぐりやしたじやアごぜへせんか (三上14ウ 2)

○ナントすごい大将じやアごぜへやせんか (三上14オ 7)

〔車夫→客〕 1

○旦那浅くさまで帰り車へおめしなせへやせんか (二下13ウ 7)

〈ヤセンノ〉

〔西洋好きの男→客〕 1

○平人の口へは這入やせんのサ (初7オ 5)

(6) セン系

終止形

〈セン〉

〔西洋好きの男→客〕 1

○モシ西洋にやアそんなことハゴウせん (初7ウ 4)

〔芝居者→旦那〕 1

○五分も透きやアごぜへせん (三上14ウ 4)

〈センゼ〉

〔野幫間→客〕 1

○ありやアたゞものじやアごぜへせんぜ (初19オ 5)

連体形

〈センカ〉

〔西洋好きの男→客〕 1

○空から風をもつてくる工風ハ妙じやアごうせんか (初8オ 1)

〔落語家→若旦那〕 2

○エモシひらけねへ手あひじやアごぜへせんか (三上23オ 6)

○くぎりの飯をしめるとしやせうじやアごぜへせんか (三上25オ 8)

〔野幫間→客〕 1

○柳橋辺でおうかれすぢじやアごぜへせんか (初16ウ 3)

3-4 「ぬ」「ん」の否定表現体系

以上の結果を整理すると、第7表のようになる。

第7表

	使 用 度 数				使 用 者 数			
	常 体		敬 体		常 体		敬 体	
	ヌ	ン	マ	セ	ヤ	セ	マ	セ
未然								
連用	12					7		
終止	2	8	5	4	10	3	2	2
連体	3	3		1	4	4	2	2
仮定							3	
命令	3							
計	20	11	5	5	14	7	10	3
							1	3
							5	4

常体ではヌが四活用形、ンが二活用形、敬体ではマセヌが一活用形、マセン、ヤセン、センがそれぞれ二活用形である。終止形と連体形の使用度数は、使用者数が少ないので明確ではないが、ヌ系よりン系の方が常体も敬体も優勢なようである。

3-4-1 下接語の種類

終止形と連体形の下接語は、整理すると次のようになる。

〔終止形の場合〕

ヌ……ガ（接）・テ（終）

ン……ガ・カラ（接）・ケレバ（接）・（終止用法）

マセヌ……ガ・テ・（終止用法）

マセン……カラ・ゼ・（終止用法）

ヤセン……ガ・ヨ・（終止用法）

セン……ゼ・（終止用法）

〔連体形の場合〕

ヌ……デ（接）・モ（係）・（連体用法）

ン……カ・（連体用法）

マセヌ……〈なし〉

マセン……カ

ヤセン……カ・ノ

セン……カ

下接語の種類は、このように終止形が一種か二種か三種、連体形が一種か二種で、きわめて少ない。これは、ヌ・ンの用法が限定されていることを示すものであろう。

3-4-2 待遇関係

そこで、終止形と連体形の話し手と聞き手の関係をみると、上下関係が明らかなのは次の通りである。

〔ヌの場合〕

上→下の関係 士→町人 ヌテ・ヌデ・ヌモ

〔ンの場合〕

上→下の関係 鄙武士→牛店の女中 ナカ

〔マセヌの場合〕

下→上の関係 町人→士 マセヌ・マセヌガ・マセヌテ

〔マセンの場合〕

下→上の関係 芝居者→旦那 マセンカラ・マセンゼ・マセンカ
野幫間→客 マセンゼ
牛店の女中→商法個 マセン

〔ヤセンの場合〕

下→上の関係 車夫→客 ヤセンカ
芝居者→旦那 ヤセンガ・ヤセンカ
落語家→若旦那 ヤセン・ヤセンガ
野幫間→客 ヤセンヨ

〔センの場合〕

下→上の関係 芝居者→旦那 セン
落語家→若旦那 センカ
野幫間→客 センゼ・センカ

すなわち、常体は又もんも上→下の関係、敬体のマセヌ・マセン・ヤセン・センはいづれも下→上の関係にある。したがって、又・ンとマセヌ・マセン・ヤセン・センとは互に相反する待遇関係にあったものと考えられる。

3-4-3. 話し手の位相

そこで、身分・職業・性別の明らかな人とその他の人に分けてみると、次のようになる。なお、*印は、終止形・連体形を使用していないことを示す。

〈男〉 〔士〕 2 士・鄙武士
〔商〕 1 町人
〔他〕 9 生文人・薬医者・西洋好きの男・芝居者・落語家・野幫間・
車夫・*あくぬけした男・*文盲の男・*馬
〈女〉 〔女〕 3 牛店の女中・*歌妓・*それしゃあがり（ひき）

このグループにしたがって使用度数をみると、第8表のようになる。

すなわち、終止形・連体形についてみると、〔士〕は又系とン系を使用し、〔商〕はマセヌ系を用い、〔他〕は又・ン・マセン・ヤセン・セン系を使い、〔女〕はマセン系を使用している。したがって、〔士〕〔商〕〔女〕には、たがいに共通するものもなく、身分・職業・性別による使い分けがみられる。しかし、連用形は〔士〕〔商〕〔女〕および〔他〕のいずれも共通して又系のズ

第8表

			使 用 度 数	身分別使用度数		身分別使用者数			使 用 者 数
				士	工	商	他	女	
常	未然連用	ズ	12	3	2	4	3	2	1
	終止連体	ヌ	2	1		1		1	2
体	終止連体	ン	3	2		1		1	2
	終止連体	マセヌ	6		8			2	2
敬	終止連体	マセヌ	2		5			1	1
	終止連体	マセン	1		3	1		2	3
体	終止連体	ヤセン	3		1			1	1
	終止連体	ヤセン	6		10			4	4
常	仮定命令	セン	3		4			3	3
	常体	ネ	2		3			3	3
			3	1	2	1	2		3

を用いており、仮定形には〔士〕〔他〕でヌ系のネと、ネバの融合形ニヤアとを用いている。

そこで、〔他〕の終止形・連体形の使用者を、〔士〕〔商〕〔女〕の否定語を基準として、(I) ヌ・ン使用 (II) マセヌ専用 (III) マセン専用 (IV) ヤセン・セン使用 に分けてみると、〔他〕は、

(I) ヌ・ン使用	2	生文人・医師
(II) マセヌ専用	0	
(III) マセン専用	0	
(IV) ヤセン・セン使用	5	芝居者・落語家・野賛間・車夫・西洋好きの男
となる。		

そこで、終止形・連体形を基準として、(A) ヌ・ン使用者 (B) マセヌ専用者 (C) マセン専用者 (D) ヤセン・セン使用者 (E) 終止形・連

体形の不使用者 に分けると、

〈男〉

(A) ヌ・ン使用者

〔士〕士・鄙武士

〔他〕生文人・蔽医者

(B) マセヌ専用者

〔商〕町人

(D) ヤセン・セン使用者

〔他〕芝居者・落語家・野幫間・車夫・西洋好きの男

(E) 終止形・連体形の不使用者

〔他〕あくぬけした男・文盲の男・馬

〈女〉

(C) マセン専用者

〔女〕牛店の女中

(E) 終止形・連体形の不使用者

〔女〕歌妓・それしやあがり

とグループ化できる。そして、男は (A) (B) (D) で、明らかな身分差がみられる。女は使用者が少なく明らかでない。

3-4-4 活用体系

そこで、以上のグループを基準として、人物別・活用形別に、ヌ・ン・マセヌ・マセン・ヤセン・センの使用状態をみると、次の第9表のようになる。

すなわち、全活用体系で比較すると、(A) に属する武士と教養人は、ヌ・ンの常体だけを用い、中でも士はヌ系だけである。(B) の町人は常体の連用形と敬体の終止形マセヌを使用し、(D) に属する人は連用形が常体で、終止形・連体形は敬体のマセン・ヤセン・センのン系である。(A) (B) (D) のグループの間には明確な使い分けがみられる。

また、(D) のグループは終止形・連体形がいずれも敬体である点が注目される。なぜなら、これらの待遇は、いずれも下→上であって、上→下、対等の関係がみられないからである。そこで、助動詞ナイ・ネエの用法と比較して動

作の否定表現体系を考察してみることにしよう。

第9表

			常 体			敬 体				常体	
			ズ	ヌ	ン	マセヌ	マセン	ヤセン	セン	ネ	
			未然	連用	終止	連体	終止	連体	終止	連体	仮定
男	(A)	士 武 生 医	士 人 者	3 1 1	1 1 3 5	2 1 1					1 1
	(B)	町	人	2			5				
	(D)	芝 落 野 車	居 語 幫 夫					2 1 1	3 4 1	1 2 1 1	
	(E)	西洋 好き	の男						2 1	1 1	
	(C)	牛 店	の女 中					1			
女	(E)	歌 それ しゃあがり	妓 あがり	2 1							
		計		12	2 3	8 3	5	4 1	10 4	3 4	3

3-5 助動詞「ない」「ねえ」と「ぬ」「ん」との関係

3-5-1 下接語の種類

終止形と連体形の下接語を比較すると次のようになる。

ナイ 12 ガ(接)・カラ(接)・シ・ト(格)・ト(接)・ナンゾ・ヨ・
ワ・カ・ジヤア・デ(接)・ノ

ネエ 13 ガ(接)・カラ(接)・ケリヤア(接)・ゼ・ダ・ト(格)・
ト(接)・ヨ・ワ・カ・ジヤア・デ(接)・ノ

ヌ 4 ガ(接)・テ(終)・デ(接)・モ

ン 4 ガ(接)・カラ(接)・ケレバ(接)・カ

マセヌ 2 ガ(接)・テ(終)

マセン 3 カラ(接)・ゼ・カ

ヤセン 4 ガ(接)・ヨ・カ・ノ

セン 2 ゼ・カ

下接語の種類からみると、ナイ・ネエは下接語の種類が多く、ヌ・ン・マセヌ・マセン・ヤセン・センは種類がきわめて少ない。

3-5-2 待遇関係

待遇関係をみると、

上→下の関係 ナイ・ネエ・ヌ・ン

下→上の関係 ナイ・ネエ・マセヌ・マセン・ヤセン・セン

となり、ナイ・ネエは上→下にも下→上にも用いられ、待遇の範囲が広い。

3-5-3 話し手の位相

話し手の位相を比較すると、身分・職業・性別の明らかな話し手は、

士 ヌ・ン

工 ネエ

商 ナイ・ネエ・マセヌ

女 ナイ・ネエ・マセン

となり、〔士〕〔工〕〔商〕〔女〕に話し手の位相による使い分けが明らかである。そこで、終止形と連体形のナイ・ネエ系の使用者と、ヌ・ン・マセヌ・マセン・ヤセン・セン系の使用者とを、どちらか専用・共用の基準で分類すると、次のようになる。

〈男〉

(A) ヌ・ン専用者	〔士〕士・鄙武士 〔他〕生文人・戦医 者
(B) ナイ・マセヌ共用者	〔商〕町人
(C) ネエとヌ・ンの敬体共用者	〔他〕芝居者・落語家・野幫間・西洋好きの男
(D) ヤセンの使用者	〔他〕車夫
(E) ネエ専用者	〔工〕職人 〔商〕商法個・唐物屋の番頭 〔他〕あくぬけした男・新聞好きの男・ 文盲の男・なまけものの男・牛・馬

〈女〉

第10表

性別	身分・職業	活用形	連用	終止	連体	仮定
			ナナナ ズカ ツクン	ママヤセナネ ヌンセセセ ヌンンンイエ	ママヤセナネ ヌンセセセ ヌンンンイエ	ナ ネケ レ
男	(A)	話し手				
		士	3	1 1	2	1
		武士			2	
		生文人		1 3	1 1	1
	(B)	医者		5		1 1
		町人	2	5		1
		芝居者	1	2 3 1 1	1 2	1
	(C)	落語家		4		2 6
		野幫間		1 1 1 1		1 1
	(D)	西洋好きの男	1	2 1 1	1 1	3
		車夫	2		1	
		職人			1	1
		商法個			5	10
		唐物屋の番頭				1
		あくぬけした男	1		4	1
	(E)	新聞好きの男			3	2
		文盲の男	1 1		2	
		なまけものの男			5	1
		牛			1	1
		馬			1	2 1
女	(F)	娼妓	1	8		1
		新造		1		1
		歌妓	2	6		4
	(G)	茶店女(ころ)	1 1	3		5
		それしゃあがり(ひき)	1 1	4 2		2
	(H)	牛店の女中		1		
計		12 5 2 1	2 8 5 4 10 3 22 27	3 3	1 4 4 14 30	3 2

(F) ナイ専用者	娼妓・新造・歌妓・茶店女(ころ)
(G) ナイ・ネエ専用者	それしゃあがり(ひき)
(H) マセンの使用者	牛店の女中

それぞれにグループ化された話し手は、(A)ヌ・ン使用の士族と知識人のグループ、(E)ネエ使用の〔工〕〔商〕に代表されるグループ、(F)ナイ使用の女のグループなど、身分・職業・性別のちがいを反映している。そして、これが『安愚樂鍋』にみられる明治初期東京語の動作の否定表現体系である。これを表示すると第10表のようになる。そして、このような身分・職業・性別と否定語との対応が、封建的社會制度と密接にかかわっており、そこに、この動作の否定表現体系の存在理由とその必然性があらわれている。

4.まとめ

明治初期東京語の否定表現体系は、以上考察してきたように、形容詞によって否定される「存在・指定・状態」の否定表現体系と、助動詞によって否定される「動作」の否定表現体系には、大きな違いのあることが明らかになった。

(1) 存在・指定・状態の否定は、ナイ系とネエ系によって行われ、(A)ナイ専用、(B)ナイ・ネエ共用、(C)ネエ専用の三つのグループがあり、話し手の身分・職業・性別のちがいを反映している。第3表参照。

(2) 動作の否定は、ナイ・ネエ・ヌ・ン・マセヌ・マセン・ヤセン・センによって行われ、男は(A)ヌ・ン専用と、(B)(C)(D)のヌ・ンの敬体とナイあるいはネエを用いるグループと、(E)ネエ専用に大別され、女は、(F)ナイ専用と、(G)ナイ・ネエ共用、(H)マセン使用に分けられる。そして、身分・職業・性別のちがいを反映している。第6、9、10表参照。

(3) 存在・指定・状態の否定は、ナイが士族階級に用いられたが、動作の否定は、ヌ・ンが士族に用いられた。ナイは形容詞と助動詞とで、語形は同じであるが、その使用者層に大きなへだたりがあった。

(4) 以上から、形容詞のナイ・ネエと、助動詞のナイ・ネエ・ヌ・ン・マセヌ・マセン・ヤセン・センなどの否定語は、身分・職業・性別と密接にむすびついており、どの否定語を用いるかによって、その話し手の身分・職業・性別を判

別することができる。これは福沢諭吉が「旧藩情」において指摘した中津藩の身分によることばの違いと合致する。

(5) このような身分・職業・性別による使い分けは、封建制を維持し、相手の身分を知るために、必要欠くべからざるもの一つであったと考えられる。そして、その中でも、士族とその他との間の区別が明確に行われていたようである(注8)。

明治初期は江戸末期の表現体系をうけついでいた時期で、しだいに今日の表現体系へと再構成される。その過程が東京語の成立過程であり、今後の課題である。

(注1) この用例は娼妓の引用で、客の身分が明確でないので、3-2-1以下の分析では除いた。

(注2) 「やうに」は助動詞とせず、「やう」を名詞に扱った。

(注3) 「ナイデ」は、「デ」を連体形接続の接続助詞として扱った。岩淵悦太郎ほか編『岩波国語辞典 第二版』参照。

(注4) この用例は引用で、話し手のことばのままかどうか明確でないので、3-2-1以下の分析から除いた。

(注5) この用例は、扇めん亭の善公と広小路の一庭が使者に来たときの口上の引用。

(注6) 三田村鷺魚著『江戸っ子』(15ペ)によると、江戸の市街地では、どの町でもそこに住んでいる人を分けると、地主(家持町人)、地借、店借があり、店借には表店と裏店とがあったという。こここの町人は、地主に属しているのではないかと思われる。

(注7) 「やうじや」は、「やう」を名詞に扱った。(注2)参照。

(注8) 身分・職業・性別によることばの使い分けは、指定表現体系や、人称代名詞にもみられる。

飛田良文「明治初期東京語の指定表現体系」(『方言研究の問題点』所収・昭和45年刊・明治書院)参照。

飛田良文「明治初期作品の敬語」(『敬語講座9 明治大正時代の敬語』所収・昭和49年刊・明治書院)参照。

鈴木英夫「『安愚樂鍋』の語法」(共立女子大学短期大学部文科紀要第17号・昭和48年)